



エイプリル社キーパートナー会議 議事録

議題	エイプリル社キーパートナー会議：「SFMP2.0—パートナーシップを通じた実践」
場所	エイプリル社オフィス（ジャカルタ）
開催日	2017年5月22日
時間	08:30 am - 05:30 pm（インドネシア西部標準時）
出席者	招集者 <ul style="list-style-type: none">ステークホルダー諮問委員会（SAC） 主催者 <ul style="list-style-type: none">エイプリル社 招待 <ul style="list-style-type: none">ファウナ&フローラ・インターナショナル（FFI）ファイアー・フリー・アライアンス（FFA）第三者泥炭専門家ワーキンググループ（IPEWG）KPMG PRIレインフォレスト・アライアンス（RA）リアウ生態系回復諮問評議会（RER）ロバーツブリッジ・グループ（RBG）ザ・ネイチャー・コンサーバンシー（TNC）ワタタワ・コンサルティング 出席者数：43名

討議

1. ジョセフ・ローソン（SAC委員長）

- 出席者全員に歓迎のあいさつ。および背景説明：第9回SAC会議において、持続可能性イニシアチブに関するエイプリル社キーパートナーのミーティングが必要であることが判明した。ミーティングの目的は、
 - 各組織がエイプリル社と合同または委託されて実施している活動（計画中のものを含む）についてパートナーの相互理解を深める。
 - 相乗効果、効率、重複の識別、およびこれらの活用のしかた。
 - 軸となる構想「SFMP2.0：パートナーシップを通じた実践」をめぐる様々な活動を一貫性のあるものとする。
 - パートナー、エイプリル社および多様なステークホルダーで構成するプラットフォームにおけるコミュニケーションの改善法について合意を確立する。

2. ベイ・スー・キアン（エイプリル社会長&RER諮問評議会委員長）

- エイプリル社の持続可能性に関する活動について、SACやIPEWGの設置、リアウ生態系回復プロジェクトなどのマイルストーンを挙げて概要説明。
- エイプリル社は、刷新されたパートナーシップの専門知識を活用してSFMP2.0コミットメントに積極的に取り組む。

3. RA

- RA創設（インドネシアにおける活動は1999年に開始）の背景およびミッションを紹介
- RAが実行する活動のスコープを説明：一例として、複数のエイプリル社コンセッションについてFSC-STD-CW-30-010基準に照らした内部ギャップ評価を実施。FMU選択プロセスでは主要NGOによる大規模なコンサルテーションが行われ、6つのFMUの最終選択は、ロケーションや地理的特性から社会的要素まで広範囲にわたる主要基準を基盤とした。
- RAは1回の現地視察を実施済み、6月初旬に2回目を実施する。エイプリル社経営陣への視察結果の報告説明は6月末の予定。

- 2017年下半期は、エイプリル社のFSC準備プロセスを「アドバイザー」として支援する。具体的には、各種イニシアチブについて詳細に討議する。
- SACから、RAの活動を首尾一貫した透明な方法で計画的に外部に情報提供する必要があるとの指摘があった。

4. FFA事務局

- FFAの概略を紹介：FFAは2016年3月に4社をメンバーとして設置され、先ごろサイム・ダービーとIOIがパートナーに加わった。現在、ベースライン研究の確立と共通KPIの決定、および新メンバーの情報ギャップを埋めることに的を絞って活動中。
- FFAは、6月に専門技術的ワークショップを計画。ワークショップは、既存ツールに関する討議と防火に向けた景観アプローチの詳細検討がテーマ。FFAは、プログラム拡充のため中小プランテーション企業を巻き込むことを模索中。
- FFAは、エイプリル社パートナーからのワークショップ後のフィードバックや提案を歓迎する。全世界的な資金調達機会、「カブパテン（県）」レベルでの既存プログラムの調整、および防火活動と復元の重要性に関する啓蒙活動の連携可能性について提言があった。

5. FFI

- FFIは2013年からRERの科学&研究パートナーとして、様々な生態系回復コンセプション（ERC）において炭素・コミュニティ・生物多様性（CCB）調査を実施している。ERCはスマトラトラなど重要な生物の生息地であり、独自の生態系であることが判明した。最初の3コンセプションに関するHCV報告は作成済みで、近くピアレビューに付される。
- FFIは、その他、泥炭湿地林に関してロバストなサンプル採取法による詳細炭素調査を実施。RERの最初の3コンセプションについて泥炭厚と炭素貯留量を推定した。
- 社会的要素については、地域住民に関する人口動態学&民族誌学的調査および土地利用ダイナミクス調査を完了。参加型マッピング、FPICおよび対立解決ワークショップを計画&支援した。
- 今後は、FFIはカンパール半島の4つめ以降のERCに関するCCB調査を完了させる。
- エイプリル社は、PERIによって保護—生産モデルの便益が実証されたと強調した。

6. RBG

- ロバーツブリッジは、持続可能性コンサルタントとして、諸企業に戦略・方針・実施に関する助言を提供している。現在、ステークホルダーの参加とコミュニケーションに関するエイプリル社コンサルタントとして活動。
- エイプリル社「パートナー」の最適な表現方法について討議した。エイプリル社は、同社の持続可能性に関するコミットメントは同社主導のイニシアチブであり同社が全面的責任を負う点を強調した。同時に、豊富な専門技術知識を活用する戦略に関して協働の有用性を認識している。出席者一同、対外コミュニケーションにおいてパートナーをどのように表現するかについては今後さらに論議が必要と言う点で見解が一致した。パートナーの関わり方は多種多様である一方で、ビジネスおよび法的には共通性があることを踏まえて論議を進める。

7. IPEWG

- IPEWG、IPEWGメンバー、およびミッション「木材プランテーションの責任ある泥炭管理について科学を基盤とする提言を提供すること」を紹介。
- IPEWGは、設置当初の「委託事項」を詳細なロードマップに練り上げた。ロードマップは、泥炭生態系に関する理解構築と直接的影響の最小化、管理方法の改良、および最終的に泥炭景観管理ビジョンの開発の3つのフェーズから構成される。IPEWGは、エイプリル社のデータは熱帯泥炭景観に関して最も包括的データセットとみなしており、現在、同データを利用している。

- IPEWG戦略の開発では、BRGや国際湿地保全連合など、第三者ステークホルダーの巻き込みが精力的に進められている。
- 科学研究グループとして、IPEWGは、目下の政治的論議には介入しないが、インドネシアの泥炭を取り巻く規制枠組みの変化について常に最新情報の提供を望むと、会議出席者一同に説明した。

8. TNC

- TNC代表が、TNCチームと活動枠組（2フェーズ構成）を紹介
- フェーズ1（スコーピング）の活動の結果、10項目の提言が、3つの包括的戦略——統合的景観アセスメント、景観投資、およびパートナーシップ開発——に盛り込まれた。
- フェーズ2（持続可能な景観）は、次の要素が含まれる見通し：カンパール協定の開発という目標に向けた、イニシアチブの統合、持続可能な資金調達、コミュニティの権限強化、およびパートナー・ガバナンスの強化
- エイプリル社はTNCに対し、プロジェクトの価値を高め、RERがカンパール協定のビジョンを完遂するために有用なものとなるよう、具体的で明白な行動計画の確立に向けた提言を求めた。

結論

- 今回のミーティングは、各自の活動について相互理解を深め、共通点や相乗効果を識別し、さらに率直なコミュニケーションの基盤構築の機会として価値あるものとなった点が全会一致で合意された。
- 実質的で称賛に値するイニシアチブが多数あることに合意し、パートナーはエイプリル社の「口よりも手を先に動かす」というモットーの重要性を認めるものの、今後は活動についてさらに詳細で一貫性のある方法で情報提供してほしいとエイプリル社を督励した。
- 年に1度の直接会合と、各パートナーの活動の主なマイルストーンに関する定期的進捗状況報告は、最新状況を把握し歩調を合わせる上で有用となる点、過半数が賛同した。
- 今回の会合の結果を踏まえて、明白な目標に向けての共通の枠組み／持続可能なシナリオをいっそう強化する必要がある。